益城町を回っていて人に関するレポート（気が付いた事・住民の方とのやり取りの記録）

5月4日（水）　益城町総合体育館　名前不明

職員事務所に近い廊下の角一角に座る高齢者。胸に付けているビーズの手作りブローチが可愛いらしく声を掛ける。年齢を自分から「もう90歳たい」と教えてくださる。
4月14日の最初の地震の後からこの場所に避難し、21日目。
トイレまでが遠いので、その行き来が毎日の運動代わりとのこと。
でも、ずっと座って過ごすのは年寄りには「腰が痛い・・・」
お茶を避難物資の所で貰ってきた息子さんが戻って来る。
「家は山の上の方だから、（建物自体は）崩れていない。でも家の中はぐちゃぐちゃ。大きい松がありそれが家の中に倒れて入ってきている」
「ダンプカーがドアを突き破って家の中にどーんと侵入して来たようだ」と例えてくださる。
でも。
それを片付ければ家には住める。早く片付けたいが、益城町や、３．１１東北の地震後、幸い入っていた保険の関係で、農協の人に見て貰うなど、損壊状況を３団体ほどに見てもらわねばならず、この調査を「待っている」状態。
震災の状態をそのまま見て貰うには、中の物も取り出せずにいると言う。。
「早く片付けて年寄りを家で過ごさせてあげたい」
息子さんのお父様は今年の１月、89歳で亡くなっていた。
今日の内に一度家を見に行ってこようと息子さんが言い始めた。
日が出ているうちに急いで行ってきますと、家の様子を見に、おばあちゃんと一緒に出かけていかれた。

5月4日（水）益城町総合体育館　名前不明

体育館入り口近く　YMCA事務所前の机でお菓子を配っていた小学生と話す。
裸足の足先には自作のダンボールスリッパを履いている。底と足の甲を隠す所をダンボールで形取りガムテープで貼って作っていたが、足の大きさにぴったりでいい塩梅。
「かっこいいね、スリッパ。写真撮ってもいいですか？」
「え？！ちょっと待ってください！！」慌ててガムテープで補強する。カメラを向けると直立。足と手がピッと揃えて立ってくれた。でも、「顔はまずいです、顔はいや、いや止めておいた方がいい」と照れる。
お礼を言って去る際に、ペコリと頭を下げて見せてくれたやさしい表情が印象的だった。

5月4日（水）益城町総合体育館　野球部　その他

体育館の外で２階にある支援物資を下に降ろす作業の声が遠くまで響いていた。野球部のユニフォームを着た中学生が２階からブルーシートを斜めに降ろし、シューターの様にして荷物を滑らせる。
「ビーっグ」「びーっぐ」オムツのサイズを上から叫ぶ。受け取る側も応え、この声が周りの者を元気付

けてくれているように感じた。

5月4日（水）→5月5日（木）

[redacted]さん宅　７０代後半くらい

損壊　住宅部分が潰れ屋根だけが残って潰れている棟が２棟　小さい倉庫が敷地入り口にある。

４日　最初の訪問時、倒壊した建物の真ん中の空いた場所に机を出して周りで休める様になっていた。
家族３世代で損壊した建物の中から荷物を取り出す作業をしていた。
[redacted]さんは、２回目の地震以降、一人で小さい倉庫に寝泊りをしている。
娘さんが向かいのアパートに住んでいたが、そこも傾いている。
家族の殆どは日中はここに来て荷物を取り出す作業をし、夜は体育館に避難して寝ている。
ただし、[redacted]おじいちゃんを案じるお孫さんが、アパートの駐車場で車中泊をしておじいちゃんの傍に付いて寝るという夜を過ごしている。
今、必要な物は何かを尋ねると「飲む水ば、お願いします」
次の日に再度訪問することを約束して失礼する。

翌日、飲料水を持って訪問。
[redacted]さん　[redacted]さん　が机の周りで暖をとっていた。息子さんは倉庫の屋根の修理中だった。飲料水を渡す。
[redacted]さん　「市内に住む息子の所に３日間はお世話になった。誰もしゃべるもんがおらんで、落ち着かんから、戻ってきました」
ご自分は血圧が高く、掛かりつけの医者から薬を貰っているので、体育館でうるさくても薬で眠ることが出来るが、ご主人は周りの声がうるさくて眠られないこともあり、またここからは離れがたいことを短く話してくださる。
挨拶をすると、二人で穏やかに微笑み、少し曲がった腰をさらに傾けてお辞儀を丁寧にして下さった。

５月５日（木）

[redacted]さん（６０代くらい）

木山城跡地に一番近い家　２階と屋根部分が残っているが１階に崩れ落ちている。
「坂の上です。どうぞ、見てください。」と、協力的で一緒にお宅へ伺う。
「２日前くらいに、外国人のグループが家の中に入って、荷物をささっと出してくれた」
アメリカ人・イギリス人・ドイツ人などで構成されるグループで阪神淡路の震災でもこういった支援をして回ったグループの様。
「どうしても出したいものがあるんよ」付いていくと、ダイヤル式ベージュの固定電話を持っている。
電話線がふすまと冷蔵庫にはさまれ、どうしても抜けない。手伝って引っ張るが動かず。
「反対からやると、いいかしれん」こっち、こっち！！と、無邪気ささえ感じる[redacted]さんに案内され、家の裏側に回る。家の中の状態が更に良く分かる。ふすまは天井からの一部を支える構造になっていて、

安易に動かすと天井が落ちてくるのではないか、という状態。そして電話線は差込式ではないので、途中で切らないと抜けない状態ということが分かる。
「新しい所にいっても、この電話を使いたんよー」若いスタッフに、「こんな電話、知らんやろ」今では貴重なダイヤル式の電話が好きで、どうしてもこの電話を使いたいという。
帰りがけに「介護ベッドも壊れんと丈夫なんよ。フランスベッドに電話してみようと思いよっと」
こういった話をしている時に、ご主人から電話が入る。
電話の内容は「なんばしょっとか？！」また、家に入って荷物を物色してないか心配で電話をしてきた。

[redacted]さんと一緒に木山城跡へ上がっていった。地割れが真っ直ぐに入った後を見た。
「見晴らしがよくて、いいところなんよ」と、小高い丘になっている木山城跡地から３６０度見渡す。裏は田んぼが広がり、見渡しのよい方向では、夏はここから花火をみていたという場所で、「暫くは花火も何にも出来ないわよね」とつぶやく。その眼下に、墓石が全部倒れたのを見る。真ん中の大きいお墓だけ、１回目の地震の時は倒れてなかったが、２回目の地震で倒れてしまった。そこの人も亡くなってしまったということを伺う。

地震の時は、車のキーと携帯だけもって外にでるのがやっとだった。「お父さんに車２台を出してもらってそこから、公衆トイレが上下に動いて地盤が液状化している状態を見ていた。
消防団の人が、ここは危ないということで助けに来てくれた。「ね、優しいやろ～」と、周りの人たちの優しさをしみじみ感じることも伝えてくださる。

お父さんは避難上で喘息の薬を貰ったが、ロキソニンが合わず、避難所でアナフィラキシー諸侯軍になり、ドクターヘリで日赤病院に運ばれた。体育館の人の多さから来る感染症も怖い。

農家は今がスイカ・メロンが収穫の時期。近所の農家さんは、もう収穫するだけになっているスイカ・メロンを前に、気力が沸かなかった話もしていたが、収穫するだけになっている生産物をそのままに出来ず、家の片付けをしたい時期だが、収穫もあり忙しくしているとのこと。本来は田植えも始まる時期でこれも心配だと話してくれた。

この後、[redacted]自動車修理工場の一階にご近所の方皆さんが集合していらっしゃった。日中は体育館からここに来て情報交換をしたりして過ごしている。

[redacted]さん
「もう、つかれちゃった」
お話を伺うと、一言目にこの言葉をつぶやいていらっしゃった。
昨日、友達のところで、洗濯をさせてもらったが、久しぶりに水道からの水で手を洗ったのが気持ちよく、普段の生活のありがたさをしみじみ感じたということだった。
改めて伺ったときに飲料水をお渡しすると、「えー本当にありがとう！！」と、大感激してくださった。